

時間は分かるが決して退屈することなく、次々と展開する古事ドラマは私の心をとりこにさせてはなさない。

夜神楽也 拜殿にさする藤の冷え

天照大神が、御弟素戔嗚尊の乱暴を避け、天の岩戸を閉じて籠もられた。この為暗黒の国土にさまざまな災いが起こり、八百萬の神々がさまざまの思いとわざを捧げて大神の出現を待望した。これは歴史でなく神話として、大きくから託記にしろされ、民族の信仰のように今日に伝承されて来た。その最上の経緯がこの岩戸神楽ではなかつたか。

天の安の河原に於ける神々たちの謀議、太玉命による鏡や玉の用意、天鈿女的命の舞、柴火の行事、すべては大神の君臨を求め、民衆(神々)の悲願であった。

このようなことを思う間も神楽はつづいた。そして最後は手力男命による戸開き、大神の出現となるのである。普通の岩戸神楽では、勇壮な所作で手力男の神が扉を開き、襖を脊にして乱舞する、少年の目に岩戸神楽を見ながら眼底にはその様に残り、法連を張られた祭壇にかがやいているお燈明と、会衆は榊で拝礼してフィナーレ(終幕)となるのである。

ここ九市辰神楽では、いささかちがう。最後の「戸取」で、手力男命はすばらしく力に満ちた舞をくり返しながら拜殿正面にしろえた天の岩戸に向って、後ろ向きに岩戸にせまり、ついに扉をあける。約二十五分間、前記の面棒をくりくりとまわしながら、この寒夜、汗をにじませながらの熱演である。私たちがはじめて見る異様な雰囲気、ダイナミックな神楽に圧倒されて、息を呑みながら見つめたのであった。

天の岩戸から、神々の出現で神楽は最高潮に達した。

天照大神を先登に、十数柱の神々(実際は八百萬の神々)が、ここを先途と吹き鳴らす笛、打ち鳴らす太鼓に合せ舞い踊る。——私はこのように拝したのであった。

霜夜こめ 岩戸にせまる手力男
あなかしこ 富辰の宮の冬まつり

時計はとうに十二時をまわっている。拜殿に(一ぱいであった村人、氏子の方々はそれそれ拝礼して退出する。私たちが深い感動を胸に、富辰神社の社殿を後にし、深夜の九市尾から帰途についた。(おわり)

岩戸神楽と大蛇退治について
——若干の反響と見解—— 羽 柴 弘

○佐伯地方の農山村で、春先(昔なら旧正月、今なら三三月)に岩戸神楽の催しがあって、かつてはなかなかな賑わっていた。今も、宇目新から直川・庄匠の農村で行われている。

○佐伯にも一座があった。山田氏がそれを率いている。要望に答えて、興業して、時折り史談会も打ち建てて見学に行く。

○いとも思ふことが神話にもつくものとして、粉装や小道具のうそである。女性の長襦袢をそのままで舞が出る。淡色か白色の衣裳にならない。メリンス(モス)のしかもはでながらのはいたけがない。

○次は刀である。近世の日本刀では困る。神話は歴史ではないが、ゆき歴史性ある考証に立って、直刀は使えないものだろうか。

○次に岩戸神楽なら、蒲江神楽のように天岩戸の神話一本にしろばれないものか。かみ八岐の大蛇(やまたのおおろち)は、高天原を追われた素戔嗚命が、出雲国でやったことで、天の岩戸の神話からは少々はみ出ている。

○そしてこれも、今の大蛇は火焔を吹きまわり煙をもうもうと出し左へ、私は少年の日に見えた米俵(もみろり入りの)の上にくくりつけた葎草の大蛇を斬る、葎草など全然使わない、原始的な演出が賛成である。(以上ご参考になれば幸いです。)